

十六歳

作

小野小町

●登場人物

ターバンの人物（イ・４・ローズ）

アメリカの少女（デイジー・５）

一 目覚めし二人

うっすらと霧のような空気と光。仰向けに倒れた人物二人の姿がみえる。上手の人物は、ターバンを巻き汚れた衣装を着ている。(イ↓4と記す) 下手の人物は、真っ白なドレスを着ている。(白↓デイジー)

二人、横たわっているが、同じタイミングでゆっくりと片腕を上げる。

二人 「痛！！」

二人は同時に上げていた腕をつかみ、目を目を覚ます。

「イ」は咄嗟に構える。

白いドレスの子は、ぼおっと辺りを見回している。

イ 「手を挙げる！！」

白 「あたし？痛っ！！」(手が痛い)

イ 「手をあげるんだ！！」

白 「そんなこと言ったって…こっちが、すぐくひりひりして、うまく上がらない…」

イ 「上げるんだ！！」

白 「ほんと、痛いわ…あたし、何か、運動でもした？」

イ 「知るか！！…痛！！…」

白 「あら、あなたも手が痛いね。大丈夫？」

イ 「こんなの…痛いうちに入るか！！手を挙げるんだ、わかったな！(と、自分の

体のあちこちを探るが…)…お前…」

白 「あ、お前じゃないわ。デイジーよ。あたしは、デイジー。」

イ 「…デイジー…アメリカ人か…」

デイジー 「あなた、偉いわ！！どうして私がアメリカ人ってわかるの？！」

イ 「デイジーなんて名前、アメリカ人の典型だ！！」

デイジー 「そうなの？」

イ 「…そんなことよりお前…」

イはデイジーの首の後ろから手を回す。

イ 「…俺の武器をどこにやった…」

デイジー 「武器？」

イ 「そうだ！！」

デイジー 「それって重い？」

イ 「は？」

デイジー 「重い、だめ。あたし、飛行機乗る時のカバンだって、持つのもうへトへトで。すぐ座り込んじゃうの。」

イ、回りの気配をさぐる。

イ 「…どこだ…」

デイジー 「どこ？」

イ 「ここ…どこだ…」

デイジー 「どこって言われるとほんと、困るのよね。あたし、何度同じ場所に行っても、一度も同じ道通って、帰って来たことなく、同じところ、ぐるぐるぐるぐる、回ってるのよね。」

イ 「…何の気配もない…」

デイジー 「そうね、静かね。でも、あなたがいるわ。」

イ 「…こんなに何の気配もないのは…初めてだ…」

デイジー 「そうね。でも、どうして、あたし、あなたというの？」

イ 「それはこっちの言うセリフだ！」

デイジー 「…あ…あなた、お姉ちゃんのお友達？」

イ 「…お姉…」

デイジー 「お姉ちゃんは人気者で、海外にもお友達が、たくさんいるのよ。」

イ 「何が友達だ！！」

デイジー 「じゃ…ひよつとして…お姉ちゃんじゃなくて…あたしの友達？！」

イ 「…今、会ったばかりだろ！！」

デイジー 「今会ったばかりでも、友達になれるって、お姉ちゃん、言ってたわ。本当に、その通りね！」

イ 「…お前な…え？」

デイジー 「あ…」

二人の上に、天から紙のようなものが落ちてくる。何か字が書いてあり、二人はそれを読む。

二人 「…ご愁傷様でございました。…ご愁傷様?!」

イ 「…ご愁傷様でございました。後は、天国へ向かうだけです。ただし、天にのぼるには以下のことをクリアしなければなりません。」

デイジー 「あなた、読むの早いのね。で、なんて書いてあるの？」

イ 「(異様に笑って)…なるほどね。まあ、そんなもんだらう。今まで生きてたのが、不思議なくらいだったから、そうか。死んだのか。」

デイジー 「死んだ?!死んだって…誰が？」

イ、自分と、デイジーを指す。

デイジー 「死んだって、あたし…死んだの!! (泣く) びええええええー!!!」

イ 「うるさい!!死んだくらいでガタガタ言うな!!」

デイジー 「ハイ・スクールの近くに、新しいピザ屋さんが出て、その、ベーコンポテ

トがすぐく美味しいって、で、食べに行くって言ったのよー！死んだら、食べられないー！！」

イ 「…なるほど…：な…お前たちにとっちゃ、死ぬってことは、美味しいものが食べられない、そんなもんなんだな、くそつたれ！！。」

デイジー「ううん、それよりもっと残念よ！！おばあちゃまのスープが…もう飲めない！！（泣き続ける）」

イ 「うるさい！！死んだんだ、死んだんだ、それで…。(沈黙の後、再び読んで)…ただし、天にのぼるには、以下のことをクリアしなければなりません…：あなたたち、二人の大事なものを三つ、手にすること。その三つを手にして初めて、天にのぼれるでしょう。追伸？…さて、ここからが大事です。大事なものは、自分では手にすることができません。つまり、目の前の他人に、手にしてもらえないのです…」

デイジー「なんだか面白いメッセージね。で、なんて書いてあったの？」

イ 「(紙を投げつけて)ふざけるな！！」

デイジー「ふざけてないわ、あたし、ちゃんとあなたの言うの、聞いたわ。けれど、どういうこと？」

イ 「自分で読め！！」

デイジー「…ただし、天にのぼるには、以下のことをクリアしなければなりません…：あなたたち、二人の大事なものを三つ、手にすること。その三つを手にして初めて、天にのぼれるでしょう。追伸？…さて、ここからが大事です。大事なものは、自分では手にすることができません。つまり、目の前の他人に、手にしてもらえないのです…わからないなあ…」

イ 「お前、一体、何勉強してたんだ、今まで！！」

デイジー「(堂々と)勉強、できない子って、ずっと言われてたから！！」

イ 「そういうことは、そんな自信持って言うことじゃないだろ！！」

デイジー「だって、正直なのが一番って、お姉ちゃんが！」

イ 「(頭抱えて)…よし、わかった…：つまり、こういうことだ…：死んだから、天に昇る、それはわかるな？」

デイジー「ええ。死んだら星になるって、おばあちゃまが！」

イ 「…よし…：で、その天に昇るために、自分の大事なものを三つ、手にしなければならぬって。」

デイジー「困るわ！！」

イ 「困る？」

デイジー「三つなんて…：どうして、百個じゃないの？」

イ 「(呆れて怒り)…黙って聞け！！…：で、その自分の大事なものは、自分で手にしないで、目の前の他人に手にしてもらわないと、天に昇れないってき…！！」
デイジー「困るわ！天に昇れないなんて！！あたし、ずっと、オバケのまま、ここにいるの?!」

イ 「だから、目の前の他人に手にしてもらえって！！」

デイジー「…目の前の…：ああ、あなたが手にしてくれるのね！！じゃ、早く！お願いする

わね。…でも、ちょっと待って。大事なもの、三つ選ぶの大変だわ、何がいいかなあ…」

イ 「どうして、俺がお前の大事なものを手にしなくちゃならない!!」

デイジー 「待ってね、今、三つ、考えるから。」

イ 「いいか？つまりはこういうことだ…お前は、俺の大事なものを三つ、手にするってことでもあるんだ!!」

デイジー 「うん。いいわよ。手にしてあげる。早く教えて？あなたの大事なもの。」

イ 「大事なもの…そんなもの…ない…」

デイジー 「あのね、お姉ちゃんが言ってたわ。小さなことを大事にしないと、だめよって。だから、小さなことでいいのよ、きつと。」

イ 「だから!!大事なものなんて…ないんだ…」

デイジー 「あ、そうね、ママの指輪とか…」

イ 「ママ？そんなもの、いるか!!」

デイジー 「え？あなた…ママ、いないの？じゃ、お姉ちゃん!」

イ 「きょうだいなんか、いない…」

デイジー 「あ、一人なのね。だったら友達のこと…」

イ 「友達？いるわけない!!…みんな…敵だ!!」

デイジー 「敵？」

イ 「そうだ!!」

デイジー 「でもあたし、敵じゃないわ。」

イ 「お前も敵だ!!お前の国は大きすぎる!!」

デイジー 「大きいっていいじゃない。ケーキも大きい方が、嬉しいもの!!」

イ 「国の話とケーキの話と一緒に、にするな!!」

デイジー 「あら、一緒よ。一緒にみんなで美味しいもの、食べたら、きつと嬉しくて仲良くなるでしょう？」

イ 「…お前、それ真剣に言ってるのか…？」

デイジー 「そうよ。牧師様も言ってたわ。食べる楽しみを心から幸せに思います。」

イ 「…じゃ…食べるものがなかったら？なかったらどうする!!」

デイジー 「わけっこするわ!!」

イ 「わけっこする、元々の食べ物がない時は、どうするって聞いてんだ!!」

デイジー 「じゃ、持つてる人にいただきましょうよ。」

イ 「持っている人間は、もっと持つことばかりに熱中して、自分のものをわけようなんて、思っただんかいない!!」

デイジー 「…そんなことないわ。だって、お姉ちゃんは、スラムの子供を助けるためのバザーをしてたわ。でね、あたしも何か作って出してって言われたの。小さな子供は、きつとクッキー喜ぶわよ、って。でね、あたし、クッキー、初めて焼こうって思ったの!!そしたら、ベタベタ、あちこちにくつつくし、粉はこぼれるし、もう大変!!ママは呆れた顔をしてたわ。どうして、姉と妹で天国と地獄の差があるの…(思い出して泣く)あたし、地獄は嫌よ。天国に行くわ。さ、じゃ、あたしから、あなたの大事なもの三つ、手にするから、その間にあたし、

「一番大事なものの、三つ、考えるわね。」

イ 「大事なものなんか…ない……」

デイジー 「あ、そうよ、大事なものって、いつも身につけてるのよね、あたしは…おばあちゃんまが誕生日に下さったネックレス！」

イ 「…なるほどな…、ネックレス…じゃ、俺の場合は、銃だ…銃ってより、マシンガンだな。」

デイジー 「マシンガン？」

イ 「ババババババババババ！」

デイジー 「そんなもの、どこにあるの？」

イ 「お前の国に山ほどあるだろ……」

二人 「痛……！」

二人、自分の痛む方の手を押さえる。

イ 「…参ったな…利き手がきかない…」

デイジー 「ほんと、どうしちゃったのかしら…」

イ 「…手は痛いし、お前みたいな馬鹿と一緒にいるのは…もっと頭が痛い……！」

デイジー 「…え？どうして知ってるの……！」

イ 「何が？」

デイジー 「お前みたいな馬鹿と一緒にいるのは…もっと頭が痛い……！それね、ママが言ってたわ！あなた、ママのこと、知ってるの？知ってるんなら、話が早いわ。さ、あたしの大事なもの、手にしてよ。そうね、じゃ、初めは……」

イ 「お前のママなんか全く知らないし、くそつくらえ！だ…が…お前とここでずつと、天国にも地獄にも行けないでオバケのまま、ウロウロするのは、もっと嫌だ…。よし、それじゃ、仕事をさっさと済ませて、お前は、とつとと天国に行くんだな。オレは…地獄に行くから……」

デイジー 「何言ってるの、一緒に天に行くのよ……！」

空間のイメージが変わる。街中。

二 花の行方

チャペルの鐘の音がする。拍手と歓声が。

デイジー 「結婚式よ……！素敵……！」

イ 「（吐くような恰好）」

デイジー 「どうしたの？素敵ね……！」

イ 「…こういう…ひらひらふるふるに…これ…これが幸せってみたいなのを見ると、気分が悪くなる……！」

デイジー 「あなた、変わった病气持ってるのね。」

イ 「病気じゃない！！腹がたつんだ！どうして…どうして…みんなこんなに笑ってるのに…。いいか、脳天気、世の中、こんな風に笑ってるヤツは、少ないんだ！！食べ物がないくて、皆死んでくっっていくのに、こんな…」

デイジー 「うそ！！」

イ 「今度は何だ！」

デイジー 「…お姉ちゃん…」

イ 「…え？…」

デイジー 「お姉ちゃんの結婚式よ！！」

イ 「はあ？！」

結婚式の音楽、流れる。

イ 「…なるほど…あれがあんたの…え？本当か？」

デイジー 「そうよ。」

イ 「ほんとに？うそだろ。えらく綺麗だ。」

デイジー 「綺麗なのよ、お姉ちゃんは！！良かった…結婚したんだ、お姉ちゃん…。ねえ、ママいる？」

イ 「知るわけないだろ！自分でさがせ！！」

デイジー 「だめよ！！お姉ちゃんね、昔からカンがよくて、あたしが前になんか出たら、きつと見えちゃうわ。こんな素敵な時に、オバケなんていたら、だめよ。ロマ
ンチックじゃないわ！！」

イ 「…綺麗だな、お前の姉さん……笑ってる…。」

デイジー 「あ、お姉ちゃんに一目ぼれしたんでしょう。そうなの、ほんとに、お姉ちゃん、素敵なんだから…」

イ 「（笑っている）いや、そっちの趣味はないよ。俺は、女は好きじゃない…」

デイジー 「え！！じゃ、男の人が好きなの？」

イ 「…そっちも…ゴメンだ…。」

デイジー 「…やっぱりママ…いないわ…」

イ 「（しっかりと見ている様子）…お姉さんの相手…。」

デイジー 「そうよ。とつてもいい人！！でも…ママは…初めてお姉ちゃんがお家に連れて来た時、黒人だつて…家に入らなかったの…。」

イ 「…いかにもありそうなことだな…お前のママつてのは、金髪で青い目で、真っ白でさぞや綺麗なんだろうな。姉さん、見てたらわかるよ。」

デイジー 「あたしたちのご先祖は、昔、アイルランドから海を渡ってやってきて、大変な苦勞しながら、家を大きくしてきたんですって。だから、当然、その歴史をわかってる、同じアイルランド系の人とつて。ママが言つてた…。」

イ 「なのに姉ちゃんは、ママの思い通りにはならなかったってわけか。いい気味だ！！」

デイジー 「そんな言い方、ママがかわいそうよ！（何か見つけた様子）ああああ！！」

イ 「なんだ！！」

デイジー「ほしい！ほしい！！あれよ、あれ！！大事なもの、手にするんですよ。あたし、あれがいい！！お花！！」

イ「花？」

デイジー「花よ、花！！花嫁のブーケ！！」

イ「そんなもん、どうするんだ！」

デイジー「ほしい！あたし、ほしい！お姉ちゃんの…ブーケ！！」

突然、花が飛んでくる。イは反射的にゲットしてしまう。

イ「…これで…仕事の一つ、終わったな…」

デイジー「嬉しい！！ありがとう！！」

デイジー、花を受け取ろうとする。しかし、バリアが張られているようで、デイジーは、花そのものに近づけない。

イ「ほら、早く。」

デイジー「だめよ…手にできない…」

イ「え？」

デイジー「手にしようと思っても…跳ね返される…！」

イ「…なるほど…そういうことか…」

デイジー「やだ、あたし、お姉ちゃんのブーケ、欲しい！！」

イ「…大事なものの三つは、自分では手にすることができません。つまり、目の前の他人に、手にしてもらえないのです…それがこういうことなんだ…。」

「こんな花！！（花を投げつける）」

デイジー「何するの！！（近づくと触れない）…お姉ちゃん、きれいだったね…ママ、残念だね…お姉ちゃん…あんなに素敵なのに…。（イに）持ってよ！！」

イ「は？」

デイジー「持ってよ、早く！！」

イ「お前が欲しいんだろ？！」

デイジー「だって、私、持てないから、仕方ないでしょ。持ってよ！！」

イ「（仕方なく、花を持つ）」

デイジー「（拍手して）…あなた…いいかも！お花、素敵！似合ってる！！」

イ「…こんなもの…持ったことない…」

デイジー「素敵素敵！！良く似合ってる！そのお洋服にもいい感じ！」

イ「…これは…戦闘服だ…」

デイジー「セントウフク？」

イ「お前の姉ちゃんのドレスとは、正反対の服ってことさ…え？！おい、何だか、大騒ぎになってるぞ…！！」

デイジー「ブーケが消えた。空中に消えたって、皆、言ってる！！」

イ「お前が欲しいなんて言うから！！」

デイジー「だって、欲しいんだもの。でも…良かった。あなたに、それ、差し上げるわ！
あたしより、あなたの方が似合ってる！いい？花嫁のブーケもらったら、素敵
な人と結ばれるのよ。」

イ「…素敵な人…会ったこともない…」

デイジー「これから、会えるわ！」

イ「…仕事…済ますぞ！」

効果音と光。

二人は部屋の中という設定で動く。

三 甘いものの果て

イ「こりやあ、また…」

デイジー「触わっちゃだめよ！！触ったら指紋がつくでしょう。ママに怒られる。」

イ「ここがママの家か…たいしたもんだな…は、なんか…見たことある…仏像…仏
像じゃないのか？よく人の国のものを…金にまかせて買い集めたな…」

デイジー「美しいものを見ている時が、一番、心が救われるって、ママ、言ってた。」

イ「こんなところに、いっぱい集めたって、お前のママ一人しか、見られないじゃ
ないか！」

デイジー「ああ、近づいちゃだめよ！！…あたしってよく壊すから…あなたは、一体、何
個、マイセンのカップ、割ればすむのよ！！…って、怒られてばかり。」

イ「…そんなもの、全部割っちゃまえ！！水は…手で飲むのが…一番、うまいんだ…」

デイジー「そうなの？でも、あたし、手を合わせても、全部、水、もれちゃうのよ！やっ
ぱり、マイセンでお紅茶、いただきましようよ。」

イ「勝手に飲め！！」

デイジー「…ママ…（じっと見つめている様子）」

イ「…はああん、なるほどな…こりやすごい…美人だ…」

デイジー、抜き足差し足で、ゆつくりと、歩く。

イ「…何やってんだ？」

デイジー「ママの後をびったりついて、歩いてるのよ！！」

イ「馬鹿か！」

デイジー「こんなにママにびったりついて歩くなんて…うそみたい！！ねえ、こんなふう
にくすぐったら、ママ、笑うかな。」

イ「お前、何やってんだ？死んでからそんなことして、何が嬉しい。」

デイジー「…生きてる時には…近づけなかったもの…。だから、こうして！！（ママを抱
きしめる恰好をするが、腕が痛む）…痛っ…」

イ「…もういいだろ。お前がいくらくっついたって、ママには何も見えないんだか
ら。」

デイジー「ママ…疲れた顔してる…」

イ「そりゃそうさ。姉は、自分の気に入らない相手と結婚するし、妹はオバケ…」

デイジー「あー！あー！！」

イ「今度はなんだ！！」

デイジー「(走って追いかける)ママ、あたしの部屋に向かっている！！」

イ「…だからなんだ！！」

デイジー「ママ、あたしの部屋なんか、一度も来たことないのよ！！だめよ、ママ！！ああああ！！」

ドアの開く音がする。二人、しばしの沈黙。

イ「…ママは美しいものが好きなんだよな…」

デイジー「…そうよ。」

イ「美しいものが好きでたくさんの美術品のコレクターのママ！！の娘の部屋か！？ほんとに…この部屋！！」

デイジー「ひどい部屋ね。」

イ「…ひどいっていうか…ママの趣味とは正反対の趣味だな…何でもあるっていうか…鍋？傘？靴片方……」

デイジー「みんな、捨てられてたものよ。だつて！！目が合ったら、ほっとけないのよ！！。ほら、あれ。あの犬のぬいぐるみ。」

イ「耳がちぎれてる…。」

デイジー「学校へ行く途中の公園のベンチに捨てられてたのよ。持って帰ったら…ママは言ったわ。いい？この家にあるものは、すべて美しくなくちゃいけないの。あなたはどうやら、この家にふさわしくないようね。」

イ「ママの気持ちもわかる気がする…こんなに違う親子もあるんだな…面白い。」

デイジー「面白くはないわ！！わ、だめ、それ触っちゃだめよ、ママ。」

イ「食い物か？…カビ？…。」

デイジー「ママのお誕生日に、何をあげたらいいかなくて、お姉ちゃんに相談したの。そしたら、お姉ちゃん、ママは何でも持つてるから、あなたにしかできないものがある。いいわって。そうね、お菓子はいかが？きれいな色のマカロン、作りましようよ。」

イ「マカロン？え？！」

デイジー「ママ！！だめよ、食べちゃだめよ！！ほら、何してるのよ、早くママから、マカロン、取って！！」

イ、思わず、奥にジャンプし、マカロンを取る。マカロンは半分欠けている。

デイジー「あああ！！ママ、食べちゃった！！死んだらどうしよう！！」

イ「あのさ、これくらい、何でもない！！いいか？人間、腐ったもの食べたって生きられる…」

デイジー「…腐ったもの?!だめよだめよ!!」

アイ「ママに食べてほしかったんだから、良かったじゃないか。」

デイジー「…三年も前よ。ママにお誕生日おめでとうって渡したら、また、拾ってきたんじゃないでしょうねって…そうよね、でも、なんだかね、街のあちこちに転がってるものを見ると、いつのまにか、手にしてるの。ママは心の病気だって、カウセリングも受けたけど…。お姉ちゃんは…誉めてくれた。あなたは、一番新しいことをしているのかもしれないわって。日本の言葉で「もったいない」ってあるんですって。物を大事にする言葉よ。捨てられたものでも、きちんときれいにしてあげれば、また命が宿るわ…」

イ「…そりゃあたいた考えたな。…物がありすぎるから…捨てるんだ。何もなければ、たった一本の鉛筆でも…たった一枚の紙でも…捨てたりするもんか…あ…」

デイジー「ママ、だめよ!!だめったら!!」

イ「かびてるのが、お前のママは好きなのか?ばくばく食べてるぞ。良かったな。」

デイジー「おいしいのかしら…」

イ「…さあな。」

デイジー「…食べて。差し上げる。どうせ、あたしは手にできないんだし。」

イ「花の次は、かびたお菓子を食べてって?!」

イ、しばらく見入っているが突然マカロンを食べる。喉につまったか、苦しむ。

デイジー「やだ…!!大丈夫?!!死んじやいやよ!!」

イ「…もう死んでるんだよ、俺たち…大事なものの、ほら二つ…片付いたぞ…。さあ、最後の三つめだ。」

デイジー「最後の…一つ…。最後って言われたら、もうちょっと考えたいわよね。そうよ、あなたの、あなたの大事なものを、あたしに言っちゃうだけ。あなた…やだ!!名前、名前聞いてなかったわ!!」

イ「名前?名前なんて…忘れた…」

四 なくしたもの

デイジー「うそ!!?!」

イ「だから…名前なんかどうでもいいんだ…」

デイジー「どうでもよくないわ!!名前ね、一番初めにもらう自分の言葉なのよ。」

イ「はん、で、お前はデイジーって名前って?」

デイジー「覚えてくれてありがとう!!そうそう。デイジー、あたしね、おばあ様と同じ名前をもらったのよ。」

イ「同じ人生歩けて?」

デイジー「同じ人生なら、おばあ様は、今、九十歳だから、あたしもオバケにならずに、生きてるはずなんだけど…」

イ「だから名前なんて、どうでもいいんだって…」

デイジー「どうでもよくないわ！…じゃ、あたし、あなたのこと、なんて呼んだらいいの？」
イ「だから、呼ぶな！…」

デイジー「これから、あたし、大事な仕事をするんでしょう。あなたの名前知らなくてどうするのよ。」

イ「うるさい！…4だ…」

デイジー「し？…(静かにの)しー…」

4「じゃない！一、二、三、四の4だ！！」

デイジー「それは番号よ。名前じゃないわ。」

4「俺は…俺たちは、番号なんだ…一、二、三、四…だから、途中の番号が消えたら、またどこかから、子供をさらってきて、番号をつけるだけだ…」

デイジー「…子供をさらう？さらうって…」

二人「誘拐。(デイジー、自分が誘拐されたかのように大騒ぎ、4に押さえられて)」

4「どうしてお前が大騒ぎするんだ！」

デイジー「大きな声出せば、誰かが気づいてきくと助けてくれるわ！！」

4「じゃ…さらわれても、声も出さずについていったら？」

デイジー「どうしてついていくのよ！悪い人についていっちゃ、だめよ、ねえ。」

4「一が言ってたよ。」

デイジー「一？」

4「ああ、一だ。一は足も速い。何があっても一番に逃げられるから、一だ。一はこう言った…。父親は落ちてきた爆弾で死んだ。残った家族は母親と小さな子供が五人、年若い老婆がいて、毎日、何を口にして生きているのか、水も、食べ物も何もかも足りない、一人でも、一人でも減れば、食べ物は…その一人分…他の家族に分けられる…だから…さらわれても、声を出さずについていくん…そう、こんな家にいるよりきつと、さらわれた場所の方が、水もある、食べ物もある、そうだ、勉強もさせてくれる、そう言った、だから、ついて行くんだ！」

デイジー「…さらわれたんじゃないの？ついていったの？」

4「自分の家に何も食べれるものがなくて、こっちへ来たら食べ物があるぞって言われたら、どうする？」

デイジー「困った時は助け合うのよ。助けてもらいましょ！いただきます…」

4「…いただきます…か…。さあ、食べさせてもらうんだ、礼をしないと…」

デイジー「御礼をいうわ。ごちそうさま、ありがとう！」

4「言葉はお礼にならない…お礼はこれだ！！」

銃撃音。デイジー、逃げ回り、4の後ろに隠れる。

デイジー「ありがとうはどうしたのよ！！」

4「ありがとうなんかいらぬ。戦うのがお礼なんだよ！」

デイジー「戦う？！」

4「戦うのが俺の仕事…さらわれた子供の仕事がこれだ！！」

デイジー「子供の仕事?!」

4 「ああ!」

デイジー「子供の仕事は食べて遊んで勉強するのよ!!」

4 「はん、違う、違うぞ!!子供の仕事は、まずはこれだ!(敬礼して)一、二、

三、四:俺の名前は四:し:死んじまえ!の:死だ!!」

銃撃音と爆発音。しばしの暗転。

4 「:一二三四:五:ゴーーー!!どこだ?!どこだ?!どこだ、ゴーーー!!」

デイジーが4と同じ衣装で登場。

デイジーは以下、5という設定。5は声が出ない。出ないまま泣いている。

4

「五!!よかった:大丈夫か?!ケガはしてないな:お前、もうほんとに:いいか?一、二、三、四、五、お前は、俺の次、五なんだから、俺の後ろにピタッとくっついてなくちゃだめだろ?いいか、俺の背中にしがみついてろ!わかったな!...もう:泣くな。泣いてたらまた、役たたずって、食べ物、もらえなくなるぞ。そうだ...」

キャンデイか何かを5に渡す。5、喜んで受け取ると、泣き止む。

4

「五:お前、:そう、よく食べて、声が出るようになればいいな:毎日こんなじゃ...:声も:出ないか:でも:食べる。食べないことには、大きな声も出ないからな。そうだぞ、いつもお前を守ってやってるんだ、少しくらい、何かさ、何か言ってくれたって、いいだろ?:俺は:お前と:話したい...」

5、必死に口を動かす。

4

「無理するな:ゆっくりとで:いいさ...。声をなくしたくらい、どうってことないさ。余計なこと、喋らなくてすむし、つかまったって、喋れないってわかったら、無理に話せて、こわいこともされないしな。:声でよかったよ...。俺?:俺のなくしたのは...。覚えてない:覚えてないんだ...。さらわれた時の母さんの叫ぶ声、弟や妹の泣く顔は覚えてる:だけど:それだけで:どこなのか、皆がどこにいるのか:自分の元の名前も:わからない:わからないんだ...。さらわれて、車に乗せられて、その車が襲撃されてぶっ飛ばされたから、きつとここがびっくりして:みんな:忘れたんだな...。お前は:声がなくなっても:家のこと:覚えてるか?屋根の形、煙突から出る煙、床に敷かれた絨毯...覚えてるか?:...:お前という:全部忘れてるのに、何か、気持ちがさ、こんな気持ち、前にもあったってさ:思うんだ。何も覚えてないけど:気持ちがだけは:まだ:ここに:ある...。いいか?お前はとにかく、五だぞ!!一、二、三、四、五だ。誰に変わってもだめだ。ちゃんと、俺の後ろにいる。え?何?

遊ぶ?」

二人、片足けんけんで、押し合う。5が勝つ。

4 「…こうやって…昔…よく…遊んだ…?…そうだ…遊んだ!」

5、4に自分の首のペンダントをかける。

4 「え?」

5、笑って拍手。

4 「似合うって?馬鹿だな、これ、え?母さん…」

突然、銃撃戦の音が。5が倒れている。4が駆けつけるが反応がない。

4 「うあー！ー！ー！！」

更に銃撃の音が続き、暗転。

ゆっくり明るくなると、うつむいた4が見える。

デイジーが立っている。ペンダントを持っている。

デイジー 「…夢…夢…見たわ…こわい夢だった…」

4 「…夢じゃない…夢じゃない!!…どうしたらいい!!…なあ、あいつ、五、五だよ!!
返してくれ、戻してくれ!!俺はまだあいつと何も話してない!!話してない
んだ!!…え…」

デイジーが持つ、ペンダントのロケットが開いている。

デイジー 「わ、美人!!」

4 「違う!!…これは…五だ…五と…五の…ママだ…返さなきゃ…返すぞ!!」

デイジー、4に渡そうとするが、4は手にできない。

4 「手にできない…」

デイジー 「手にできない…」

4 「…そうだ…これだ!これが…これが大事なもの!ほら!!」

デイジー 「ほらって?」

4 「お前の大事なもの、取ってきてやっただろ!だったら、今度はお前が手伝う番だ!」

デイジー 「そうそう!あなたの大事なもの、私が手にするのよね!」

4 「手にするんじゃない、返すんだ。」

デ 「え？」

市場の雑踏のような音。

五 ロバの目の

デ イジー 「(咳込んで) ほこりっぽいのね…」

4 「砂だ…」

デ イジー 「砂…」

4 「ああ、…空気が薄いな…」

デ イジー 「何か、動物がいる！」

4 「ロバだ。」

デ イジー 「ロバ？」

4 「ああ。ロバは荷物運んで人も乗る。大事な家族の足だ。」

デ 「車で運べばいいのに。」

4 「……車？車は…村をめちやくちやにする敵か、食料くれる味方か…どっちかだ。」

デ イジー 「ロバ、かわいい！」

4 「そういえば、お前…」

デ イジー 「何？」

4 「ロバの目に…似てるな…」

デ イジー 「あたし、ロバ？」

4 「そうだ。何だ？」

デ イジー 「目があった！ロバと！！」

4 「は？」

デ イジー 「あなたの言うとおり、友達になれそうよ！」

4 「あ…ほら！ほらほら、ロバのむこうだ！！」

デ イジー 「…おばあさん…？」

4 「…おばあさんじゃない…ママだ…」

デ 「え？でも…あんなに髪が…白い…よろよろ…歩いて…」

4 「いや…ママだ…あいつの…ママだ…どんなに髪が白くなっても…深い皺が顔に
刻み込まれても…あいつにはきれいな…きれいなママだ…」

デ イジー 「…きれいな…ママ…」

4 「それ…頼むぞ…」

デ イジー 「ええ。ロバにも挨拶してくるわね！」

4 「え…」

デ イジー 「どうしたの？」

4 「(何か嫌な予感がして)…いや…待て…」

デ イジー 「待って、持っていくんでしょ、ママにこれ…」

爆撃音が続く。4は、デイジーを自分の下に抱える。しばらくして爆撃がやむ。

デイジー「ママは?!！」

4 「…見るな…」

デ 「ママは…」

4 「見るなーーーー!!!」

4、デイジーにあたりを見させないようにじっと抱えてたまま。
やがて、歌のような言葉が口から出てくる。

4 「山のてっぺん雪がのるよ 山のすそには花がさくよ 天の思いが雪になって

山をつつむよ 花が笑うよ 花は薔薇よ 薔薇の花 花も友達ほしかろう

蝶々舞って ひらひら舞って 花をわたれよ ひらひら舞って 天をわたれよ

あの山のゆきの白さを 花に伝えて 伝えてわたれ…。

…思い出した…母さんが…歌ってた…」

デイジー「…ママに渡すんでしょ。これ!！」

4 「見るなーーーー!!!」

デイジー、4をはねのけ、しばらく呆然と立っている。

デイジー「…ロバ…」

4 「…ああ…」

デイジー「…ロバの目…あたしと…似てるんでしょ…」

4 「…ああ…」

デイジー「…目…どこよ…」

4 「…ああ…」

デイジー「顔もないわ…どこよ!！」

4 「…ああ…」

デイジー「…ママは…この子のママ…どうしてこんな…!！」

4 「…だから見るなって…。」

デイジー「これ、映画よね。映画で良く見たわ。映画では、一杯、爆弾が落ちて人が一杯

死ぬの。だって、映画だもの。お話だもの。」

4 「…そのお話を、おまえらは笑って見てるじゃないか!！」

デイジー「お話だもの!お話なの!」

4 「お話じゃない!…現実だ…」

デイジー「…ママはいつもきれいで…素敵よ。決まってるの!ママにこんなことをするな

んて…誰よ!!誰がこんなこと…!」

4 「…誰がつて!…(デイジーを見るが、沈黙す)」

デイジー「あたし、許さないわ!」

4 「…許さない…か…じゃ、どうする?戦うか?」

デイジー「…戦う?」

4 「目には目を！歯には歯を！！」

デイジー 「ああ、そうなのね。目でじっと見られたら、もっとじっと見つめるのね。歯が見えるくらい口開けたら、もっと歯が見えるくらい大きな口を開けて笑うのね！」

4 「…あのさ…」

デイジー 「そうね。それなら、あたし、できるわ。…ロバの…ロバの目を…じっと見て、こう言うわ。あなたはママを助けてえらいって…。…これ…（ペンダント）ママに…渡せなかったよ…。」

4 「…お前、持ってる。」

デイジー 「いいの?!」

4 「どうせ俺は…手にもできない…」

風の音。荒涼とした音。

デイジー 「…ここにも…人がいるの?」

4 「どこにだって人はいるさ。」

デイジー 「ビルも公園も学校もないのに…」

4 「こういう山岳地帯では、穴を掘って住むんだ。」

デイジー 「穴?」

4 「そう。家の代わりになる。ゲリラの家にはもってこいだな。」

デイジー 「ゲリラ?」

4 「突然、現れて突然戦う。最も、俺たち、子供部隊は、それだけじゃないけどな。」

デイジー 「子供部隊?」

4 「子供兵士さ。」

デイジー 「ハイスクール卒業してからよ、部隊に入るのは。」

4 「それはお前の国の話で…大きくなりすぎると、役にたたないんだ。特に女は。」

デイジー 「…わからないわね…女の人が大きくなると、役にたつと思うわよ。お母さんになつて、子供も生めるわ！」

4 「…子供を産むか…。…最悪だ…。」

デイジー 「…最悪?」

4 「…子供部隊の女の子が大きくなったら…前線で戦わずに…戦わずに…子供を産めと言われる…次の兵士になる子供をだ！好きでもないヤツの子を産めつて!!最悪だ!!だから逃げた…逃げたんだ!!」

デイジー 「…逃げたの?」

4 「…ああ…」

デイジー 「…あたし、頭、悪くないみたいよ。」

4 「突然なんだ!!」

デイジー 「…あなた、女の子なの?」

4 「…悪いか…!!」

デイジー 「男じゃないのー?!」

4 「悪かったな！！」
デイジー 「びっくりしたわ！！驚かさないですよ。」
4 「お前が勝手に男だと思って…」
デイジー 「だから…似合ってたんだ…お花。お姉ちゃんのお花…」
4 「花…。…花が笑うよ 花は薔薇よ 薔薇の花 花も友達ほしかろう…。」
デイジー 「花？」
4 「…歌だ…。思い出したんだ…この歌…母さんが…歌ってた…」
デイジー 「素敵な歌ね…。大事なものの一つ、あなたちゃんと手にしたじゃない。」
4 「…あ…」
デイジー 「大事なものは自分で手にできない、なんて書いてあったのに…。あたしは、お花と、カビたお菓子なんて…何だか不公平よ！」
4 「お前がそれがいいって言ったんだろ！」
デイジー 「さ、じゃ、あなたの大事なものの、二つ目、早く探しにいきましょう。」
4 「…ふるさと…」
デイジー 「ふるさと？」
4 「…家に…家に帰りたい…」
デイジー 「いいかも！あなたもあたしの家を見てくれたんだから、あたしも、行きたいわ、あなたのお家！」
4 「…山のとっぺん雪がのるよ 山のすそには花がさくよ ……」
デイジー 「山のとっぺんに雪がのって、山の下の方に花が咲いてるのね。…どこよ！！」
4 「どこかな…。」
デイジー 「あ、おばあちやまの村が、そうよ！」
4 「…そうか…。」
デイジー 「うん。ママは田舎暮らしがイヤだって、あまりおばあちやまのところへは行か
なかつたけれど、あたしは好きだったわ。お姉ちゃんと二人、小さい時からず
っと、バケーションに入ったらよく行った。…山のとっぺん雪がのるよ 山の
すそには花がさくよ ……懐かしい…ほんと、その通りね。」
4 「…山のとっぺん雪がのるよ 山のすそには花がさくよ ……おかしいな…。」
デイジー 「おかしい？」
4 「俺たち、こんなに違うのに…山の雪も花も…違わないんだな…。」
デイジー 「あなたの国もあたしの国も、山もあるし、花も咲くわ！」
4 「…山を見て花を見てずっと過ごせたら…いいだろうな…」
デイジー 「そうしましょうよ。」
4 「は？」
デイジー 「ふるさとの、山と花をさがすのよ！」

六 ふるさとの果て

二人して空を飛んでいるような。

4 「あ？ちよつとこの山、高くないか？えらく寒いぞ！！」

デイジー 「すごい！世界最高峰、エベレスト！！」

4 「凍るだろ！！」

デイジー 「ここにお花はないわよね。あ、あっちの山は？」

4 「随分、南にあるぞ。」

デイジー 「コーヒーが飲みたくなってきたわ。」

4 「まさか…アフリカ大陸最高峰、キリマンジャロ！！」

デイジー 「あなた、アフリカの人じゃないわね。じゃ、次は…」

4 「…きれいだな。いい形だ。」

デイジー 「ほんとう。それに、山のすそには森があるわ。」

4 「林がずっと連なってる。」

デイジー 「山が青いわ。雪もあるわ。」

二人 「富士山！！」

デイジー 「失礼しました！！」

4 「…青い…青い…山…」

デイジー 「富士山じゃないんですよ。」

4 「ああ…ただ…青くて堅い…」

デイジー 「青くて堅い…？」

4 「…青くて堅い……そうだ…そうだそうだそうだ！」

デイジー 「青くなんかいわ。この辺りの山は全部、砂と岩ばかりで…。」

地盤が崩れる音。

4 「危ない！！…そう、砂と岩ばかりだから、もろいんだ。すぐ崩れる…」

デイジー 「ここが青くて堅い山？」

4 「山の中だ…ほら、あそこ、穴があるだろう？あれは、爆発で作った穴で、そこから山の中に入るんだ。鉱山だよ。」

デイジー 「鉱山？」

4 「山は木や花だけじゃない。宝の山でもあるんだ。穴を掘り進めていくと…きれいな青い石がある…。」

デイジー 「宝石！…どこ？どこにあるの？」

4 「掘った穴から全部、石が見つかるってわけじゃない…いや、見つかる方がマレだな。…それでも…それでも…少しでもお金が欲しくて…深く深く掘り続ける…
… 穴が崩れて生き埋めになってもさ！！」

再びの崩落の音。

4 「父さん！！」

デイジー 「父さん？」

4 「父さんは、この山で働いてた…青い石がきつと、おまえたちを、助けてくれる

って。…でも…石なんかどうでもいいよ、父さん、そんな奥まで入らないで！
ちよつと掘ったらすぐ崩れる、そんなところにいちやだめだよ！他に仕事がないって…家を出て働くよ、働くから！父さん、だめだ、行かないで、父さん！！」
デイジー「（しばらく沈黙して）…そう、ここが…あなたの…ふるさと…。砂と岩の山のある、でも山の奥深いところに、青く輝く石がある…ここがあなたのふるさとね…。…あ、じゃあ、家、あなたの家、近いんじゃない！？」

4、ゆつくりと指をさす。

4 「…あれだ…」

デイジー、ゆつくり進む。4は、ゆつくりと下がり見えなくなる。

デイジー、ドアを開けて中に入る様子。少し、いろいろ触れながら。

そしてデイジーは「峠のわが家」を歌う。

デイジー「そこは、とても簡単な家で。屋根もただのつかつてるだけの、簡単な家で。風も雨も入るだろう。ベッドも机も電気もない…。それでも家だと、自分の家だと…。…ほんとに…ほんとにここが家？！！何もないよ。何も…大事なもの…大事なもの…」

デイジー、破れた赤い布を見つける。

デイジー「こんな、落ちてるもの拾ったら、またゴミなんか拾ってって、おこられる…どうしよう…！」

布を手にしているデイジー。ゆつくりとやってくる4。

4 「…おかえり…」

デイジー「あ…」

4 「家…どうだった…」

デイジー「あ…忘れてたわけじゃないの。でも…（布を見せる）これしかなかったわ。なんでも拾う昔の病気が出たわけじゃないのよ、ほんとに…。」

4、じつと布を見ているが、触れることはできない。

デイジー「…これ…」

4 「…服…。母さんが作ってくれた…服…。母さんが糸を紡いで織った布で作ってくれた…服だ…。」

デ 「…あなたの？！」

4、うなずく。

デイジー「…花の色ね。赤い花！」

4 「…花は薔薇よ。薔薇の花…：薔薇…？…。」

デイジー「そうよ、薔薇よ！」

4、笑うような泣くような。

デイジー「何がおかしいの？」

4 「いや…ありがとう…。」

デイジー「どういたしまして！だって、友達でしょ。あたしたち！」

デイジーは、手を差し出すが、4は出さない。

七 花をその手に

4 「さ、後一つ。大事なもの、考えたか？」

デイジー「お花とマカロンでしょ。最後の一つは特別よ！！」

4 「特別？何でもいいよ。三つ揃えば…やっとお前と…さよならだ…。ほら、最後の一つ。早く…言え。そしたら天に…」

デイジー「…でも…不思議よね。あたし、病気もしない元気だけが取り柄だったのに、どうして死んだのかしら。」

鐘の音が聞こえる。

二人 「…あ…」

デイジー「…この鐘…」

4 「…これ…」

デイジー「…新しい鐘が出来たから、お寺につけるっていった。そう、あたし、旅行してたのよ！」

4 「…旅行？」

デイジー「旅行してたの。十六歳になったから。」

4 「…十六歳…」

デイジー「そう。十六歳になったら、車の免許、取れるの！」

4 「車？お前が運転するの？！」

デイジー「そうよ。十五歳になったら、学校のドライビング・クラスで勉強するの。…あたし、どの授業の単位もちゃんと取れなかったのに、ドライビング・クラスはイケたのよ！ママもお姉ちゃんも、信じられないって。あたしも信じられなかったわ。あたし、車の運転の才能あるのよ！」

4 「…絶対一緒に乗りたくないな…」

デイジー「で、車の免許も取れたし、十六歳のお祝いに海外旅行につてママが。お姉ちゃんも十六歳で留学したし、あなたも少しは世界に広く触れなさいって。で、この際、あちこちね。でも、道も車も、国によって全然違うのね！あなたも、運転する？」

4 「何かしら思い出したのか）…ああ…」

デイジー「運転、うまい？」

4 「…ああ…そう…逃げてた…すごいスピードで…」

デイジー「危ないわ！だめよ！！」

4 「逃げて逃げて人が多くて車が邪魔になって降りた…」

デイジー「知らない町…。遠いところに来たんだなって思った。…服も髪型も私とは違う人たち…。…沢山の人が…鐘の鳴るのを待っていた。昔、戦争で壊された鐘が、お寺の天辺についたのを、皆がじっと見ていた。そして、鐘が鳴るのを…待っていた。」

4 「もう二度と、あんなところに戻りたくない！俺は車から降りて人ごみに隠れた…」

デイジー「鐘がなったわ。」

二人 「一つ、二つ、三つ…」

4 「その時、俺を追っかけてきた一人が、何か投げた…」

デイジー「いい音だったわ。みんな、天を見てた…」

4 「…投げた…」

爆発の音が。

4、デイジーの腕を握る。

二人、握りあったまま、伏す。

4 「…その日のことを…新聞はこう伝えていた。少女二人の手は、握り合ったまま、少し離れたところに飛ばされていた…」

音楽 「悲しくてやりきれない」

デイジー「大事なもの、三つ…」

4 「…こんな…こんなこと…俺のせいで…お前は…」

デイジー「三つ目！もらったわ。あなたの手！」

4 「（しばし、沈黙して泣いているような笑っているような顔で）…俺は…もう大事なものの三つ…もらってる…三つ目は…名前。」

デイジー「名前？」

4 「あたしの名前は…薔薇…」

デイジー「薔薇？！ローズ！ローズね！あたしの名前は、デイジー！！二人とも…」

二人 「…花の名前よ…」

ローズ 「…山のとっぺん雪がのるよ。」

デイジー 「山のすそには花がさくよ」

ローズ 「天の思いが雪になって…」

二人 「山をつつむよ 花が笑うよ」

ローズ 「花も友達ほしかろう」

デイジー 「蝶々舞って ひらひら舞って」

ローズ 「花をわたれよ ひらひら舞って」

二人 「…天をわたれよ！」

赤い花と白い花のお花畑が。

そして二人は、色の違う花を背景に、痛みを感じていた手を、互いにゆつくりと差し出し、その手をあわせる。

赤と白の花は永遠に咲くことだろう。

完

●上演記録

・初演

小町座第八回企画・二人芝居「十六歳」

2010年(平成22年) 1月30日 奈良市音声館

演出 小野小町 出演…大野美伸 武藤直緒

・再演

小町座二人芝居企画 二〇二二 「十六歳」

2022年(令和4年) 8月27日 奈良市音声館

演出 小野小町 出演…西村智恵 井原蓮水

●作者連絡先 小野小町(おの・こまち) komachi.office@gmail.com